

基礎ゼミナールの授業評価アンケート結果の考察

基礎ゼミナール部会長、都市環境学部准教授

小根山 裕之

はじめに

「基礎ゼミナール」は、「考える・調べる・発表（表現）する」といった、より積極的に能動的な学習姿勢と、課題発見、問題解決能力の養成を目的とした、少人数（最大1クラス当たり24名）によるゼミナール形式の授業である。1年前期に受講する必修科目であり、今年度は受講学生1,699名に対して79クラス開講した。本稿では、FD委員会と教務委員会基礎教育部会が実施した「21年度前期基礎ゼミナールの授業評価アンケート結果」について、その概要を紹介する。

調査対象と回収率

受講学生と担当教員の両方を調査対象とした。以下、学生による授業評価をSE、教員による授業評価をTEという。SEでは、受講学生1,699名に対して1,381名（回収率81.3%）、TEでは、担当教員79名に対して68名（回収率86.1%）の回答があった。

質問項目

12問の質問項目を設定した。質問項目を表1に示す。うち、第1問～第8問については共通事項として他の教養科目と同じ設問であり、第9問～第12問は個別事項

として基礎ゼミナール独自に設定した設問である。個別事項としては、基礎ゼミナールの目標である、問題発見・解決能力（問10）とプレゼンテーション能力（問11）の達成度に関する設問を設定した。また、基礎ゼミナールは人数の制約上必ずしも希望のクラスを受講できない場合もあることを踏まえ、テーマに対する関心（問9）の設問を設定した。その他、教員の解説と受講生が実際に自ら活動する時間のバランス（問12）を確認した。

回答結果の考察

まず、学生の満足度に注目すると、SEの【満足】（この授業を受講して満足した）について高評価（回答が5：強くそう思う、4：そう思う、の合計。以下同じ）の比率は、68.7%であった。また、SEの【態度】（この授業に意欲的・積極的に取り組んだ）の高評価は71.6%であった。いずれも、他の講義科目との比較では高水準であり、自らが主体的に参加するゼミナールならではの特徴と言える。ただ、昨年度を見ると【満足】は75.7%、【態度】は81.1%であり、ここ数年いずれも改善してきているのに反して、今年度は大きく下がっている。

その他の項目では、【対応】（教員は学生の意見・質問に対して適切に対応した）について、高評価が

表1 質問項目及び略称

質問項目		略称
共通事項	問1 私はこの授業に意欲的・積極的に取り組んだ。	【態度】
	問2 授業の目的を意識しながら学習することができた。	【意識】
	問3 教員の説明はわかりやすかった。	【説明】
	問4 教員は学生の質問・意見に対して適切に対応していた。	【対応】
	問5 授業時間外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか？	【時間】
	問6 成績評価方法について十分な説明があった。	【成績】
	問7 シラバスに目標として掲げられている知識や能力を獲得できた。	【成果】
	問8 私はこの授業を受講して満足した。	【満足】
個別事項	問9 SE この授業テーマは自分の関心にあっていた。 TE この授業で学生がテーマに関心を持つように教えた。	【主題設定】
	問10 問題発見と、その解決に向けた取り組み姿勢の重要性を認識した。	【問題発見】
	問11 ディスカッションやプレゼンテーションなどの自己表現能力を向上させることができた。	【表現能力】
	問12 受講生による議論・調査・発表の部分に対し教員によるテーマの解説部分の時間配分はどうか？	【バランス】

75.2%であった。しかし、昨年度の85.2%と比較すると大幅に低下している。

上記の通り、昨年度との比較では高評価の比率が下がっている項目が多い。これらの年度別比較は年度毎の学生の特質に依存するため、単純比較はできない。ただ、学生の積極的な取り組みを喚起し、満足度の向上に結びつけるための授業改善の取り組みを継続的に実施していく必要性を示唆する結果と言えよう。

一方、学生からの評価の低い項目は、【成果】(目標の知識や能力を獲得できた)と【成績】(成績評価方法について十分な説明があった)であり、高評価はそれぞれ49.3%と42.5%であった。この傾向は昨年までと同様であるが、昨年度よりは若干改善傾向にある。成績評価基準を明確化するなど、近年の取り組みの成果の現れと言えなくもないが、更なる改善努力が求められる。

学生評価と教員評価の比較

学生評価と教員評価の比較を、クラスデータ(学生のSEを元に算出したクラス毎の平均値)とTEとの比較で見たところ、多くの設問で教員に比べて学生が低い評価となっていた。特に、【成績】で顕著(教員の高評価70.3%に対し、クラスデータの高評価はわずか28.2%)であり、その他【主題設定】(同じく92.5%と74.6%)、【説明】(91.0%と81.7%)なども差が見られた。また【時間】(29.4%と7.0%)も差が大きい。これらは、教員が授業中に説明等を行い、実施内容の指示も適切に行ったつもりになっているにもかかわらず、学生には十分に伝わっていなかった可能性を示す結果である。教員と学生が適切なコミュニケーションを図り、学生の理解度を確認しつつ進めていくことが求められると言える。

一方、【バランス】(受講生による議論・調査・発表の部分に対し教員によるテーマの解説部分の時間配分のバランス)については、教員側は4割弱がちょうど良い以外の回答なのに対して、クラスデータによる評価では9割程度がちょうど良いと回答していることが

わかる。どの程度解説・講義に当てるべきかは担当教員が苦慮する点の一つであるが、学生からはある程度好意的に受け取られているようである。今後とも、基礎ゼミナールの目的を踏まえつつ、バランスに配慮した授業運営をお願いしたい。

自由記述についての考察

自由記述欄への記述は、学生から延べ341件、教員からは延べ65件であった。昨年は学生が延べ604件、教員が延べ87件であったことを考えると、大幅に減少している。授業の方法論がある程度成熟してきたので特筆すべき意見が減ったのか、アンケートの方法論の問題か、あるいは学生の意欲、積極性、能力の低下を表しているのか、いずれの可能性も考え得るが、原因を注意深く探る必要がある。

学生の自由意見の設問を項目別に見ると、「改めて欲しい点」(131件)、「良かった点」(153件)、「その他」(57件)であった。改めて欲しい点としては、授業の内容に関するもの(内容が専門的で難しすぎた、など)と、授業の進め方(議論、グループワークの時間を増やして欲しい、など)に関するものがあった。これらの自由意見は貴重で参考にすべきものを多く含んでおり、各授業担当者には次年度への改善に生かしていただくと幸いである。それとともに、全体的な傾向を分析して、基礎ゼミナールそのもののあり方や講義の方法論の改善に生かしていく必要がある。

おわりに

授業評価アンケートの結果からは、基礎ゼミナールは学生の満足度も高く、授業の目的もある程度達成されているように見受けられる。しかし、導入されて数年の未だ発展途上の教科であり、その成否は各担当教員の試行錯誤に頼っているのが実情である。成功事例、要改善事例を蓄積し、担当教員間で共有化し、各教員の授業計画・運営に生かしていく効果的な枠組みを考えていく必要がある。